

「価値の誘導(Die Ableitung des Werts)」について

——『経済学批判』から『資本論』現行版へいたる改訂の検討を通して——

大 木 啓 次

まえがき

『資本論』現行版・第一部・第一篇・第一章「商品」にあたる部分は、『経済学批判』から『資本論』第一版へ、ついで『資本論』第二版へと、マルクスが精魂かたむけ、念には念を入れて仕上げていったものである。

『資本論』初版の「序文」にいう。

「……………以前の著書(『経済学批判』)の内容は、この巻の第一章(現行版の第一篇)に概括されている。そうしたのは、つながりをつけ完璧さをきすためばかりではない。敘述が改善されている。事情がなんとか許したかぎり、以前にはただ暗示されただけの多くの点が、ここではさらにすすんで展開され、

「価値の誘導(Die Ableitung des Werts)」について

また他方では反対に、あちらでは詳しく展開されたことが、ここではただ暗示されるにとどまっている。……………すべて端緒は困難であるということとは、どの科学にもあてはまる。だから、第一章、ことに商品の分析を含む節の理解は、もっとも困難であろう。さて、価値の実体と価値の大きさとの分析にかんしてさらに詳しくいえば、私はこれができるだけ平易化した。」

『資本論』第二版の「後記」にいう。

「第一版の読者達に、私はまず、第二版でなされた変更について報告しなければならない。……………本文そのものについていえば、もっとも重要なのはつぎの点である——第一章・第一節では、それぞれの交換価値がみずからを表現する諸方程式の分析による価値の誘導が科学的により厳密に遂行されており、ま

た、第一版では暗示されただけの、価値の实体と社会的必要労働時間による価値の大きさの規定との関連がはっきりと力説されている。第一章・第三節(価値形態)はまったく書きかえられているが、それはすでに第一版での二重の敘述が必要としていたものである。……第一章の最後の節「商品の物神的性格云々」は大部分変更されている。第三章・第一節(価値の尺度)は綿密に修正されている……第七章、ことに第二節は著しく書きかえられている。」

『資本論』第一部・第一章は、『資本論』全体のなかで、おそらくもっとも頻繁に、もっとも数多くの人々に読まれた部分であろう。また、『資本論』についての研究文献においても、おそらくもっとも多く関説されている部分であろう。しかしながら、『資本論』の当該個所が『経済学批判』から『資本論』初版を経て仕上げられていった経過をふりかえり、それら三者での敘述を系統的に比較研究した文献は意外なほどに極めて稀なようである。

この小論では、主として価値の誘導についての『資本論』初版および現行版における敘述を比較検討し、かつまた、『経済学批判』での敘述を参照していこうと思う。そしてそのことによって、『資本論』の最重要な基礎的部分をなす、つまり、科学的経済学の他のあらゆる分野にたいし、それらの礎石としてかわりあいをもつ当該個所についての、みずからの理解に資するところありたいと思う。(念のため申しさえれば、価値の

量的規定についての部分は、本稿の考察範囲外にある。)

拙稿中、『資本論』のそれぞれの個所についての、宇野弘蔵教授の、またときに鈴木鴻一郎教授の理解を検討させていただいたが、未熟な筆者に大いにありがちな誤解・曲解があった節は、深くおわび申し上げたい。

諸先学の御教示をおねがいたします。

(本稿中、『経済学批判』、『資本論』初版および現行版からの引用個所の指示については、それぞれ㉔、㉕、㉖とし、便宜上、『経済学批判』は国民文庫版邦訳本、『資本論』初版は岩波文庫版・長谷部氏邦訳本、『資本論』現行版は青木書店版・長谷部氏邦訳本Iでの頁数のみにておこなう。『資本論』初版、現行版に共通なときは、現行版のみを指示する。また、途中に、余り長い註を入れると大変読みづらくなるので、宇野弘蔵教授の所説にたいする検討は、註とは別の補説とし、拙稿各節末においた。)

## 一、最初の分析の対象——商品

『資本論』(第一・二版)は、有名なつぎの文章で書きはじめられている。

「資本主義的生産様式が支配的におこなわれている諸社会の富は、<sup>(1)</sup>「**老大な商品集成**」として、個々の商品は、その富の要素形態としてあらわれる。だから、われわれの研究は、**商品**の分析でもつてはじまる。」(㉔—一三頁)

(1)・(4)この『資本論』冒頭の商品は、歴史的にまた論理的に、いかなる性格の商品であるのか、また、あるべきなのかというこ

とをめぐって、種々な見解が提示されてきている。こゝは、それを詳論すべき場所でないので、筆者の見解のみを要記しよう。

『資本論』冒頭の商品が、いかなる性格の商品であるのかは、ほかならぬ『資本論』冒頭のこのパラグラフが、当面必要かつ充分な説明を与えている。すなわち、その商品は、資本主義経済における生産物の、もっとも簡単な、一般的な、基礎的な経済的形態たる商品である。その商品は、いわゆる経済学の downward process の到達点、 upward process の出発点としての商品である。だから、すでに資本主義経済を前提として表象におもいかべたうえでの単純なる商品である。この単純なる商品は、その抽象性のゆえに過去数千年の歴史をもつが、その抽象という規定性は資本主義的生産関係の客観的産物でもある。『資本論』冒頭の商品は、資本主義的商品から抽象した、すなわち、資本の生産物としての特殊な規定を捨象した、また、商品の外部からする一切の攪乱の諸事情を捨象した、単なる商品である。

(この問題について、筆者は、以前、つぎの拙稿において闡説した。『資本制下における価値法則』宇都宮大学研究集昭和二八年度号所載・(5)。および「経済学の理論体系における若干の問題について」東北大学経済学会研究年報『経済学』四四号所載・(六)。単なる商品といわれるさいの「単なる」もしくは「単純なる」という規定のたち入った説明については、山本二三九教授の「人間の労働の経済学的考察(三)」『立教経済学研究』第一五巻第四号所載・の一六〇頁および一七一〜一七三頁を参照された。い。「資本の生産物としての特殊な規定が捨象された商品」とい

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」*フーコー*

うことたち入った説明については、久留間敏造教授の「マルクスの価値尺度論——宇野教授の“マルクスの価値尺度論”への反批判を通して——(II)『思想』一九六四年二号所載・の一〇六〜一〇七頁を参照された。)

(I)・(II)念のためにいえば、『資本論』が、なぜ商品分析からはじまるのかという問題にたいする当面必要な説明も、右と同様、『資本論』冒頭の商品のこのパラグラフに与えられている。そのよりたち入った説明は、なかんずく、『資本論』現行版では第一章・第四節においてなされている。この点については、詳論すべき別の機会を後程得たいと思う。

右の、二つの文章からなる『資本論』冒頭のパラグラフは、資本主義的生産様式にかんする科学的経済学において分析されるべき最初の対象として商品を示すものである。最初に分析される商品は、使用価値と交換価値(実は価値)との統一物としてそれ自身が矛盾をもち、貨幣となり資本となる運動の主体(Das Subjekt)たりうべきものである。『資本論』の端緒において分析されているこの主体たりうべきものは商品なのであって、使用価値でもなければ、交換価値(価値)でもない。このばあい使用価値および交換価値(価値)は、商品の二要因たりうるのみであって、それら自身が矛盾をもち、運動の主体であることのないものである。

## 二、使用価値の面からの商品の考察

商品の分析は、労働生産物が商品としてあらわれる形態の分析によっておこなわれる。この商品分析では、商品が、まずその使用価値の面から考察される。「物の有用性は、その物をして使用価値たらしめる。……鉄、小麦、ダイヤモンド等々のような商品体そのものが使用価値または財である。」(⑩ 一四頁) また、「使用価値としての商品のこのような(人間の欲望の対象であるという——大木)存在(Das Dasein)と、商品の自然的な「手でつかみうる存在(Die Existenz)とは合致している。」(⑪ 一五頁) だから、使用価値であるかぎりでの商品の考察にあたっては、経済学的に分析さるべき、それ自体に特有な問題は存しない。また、当面の分析の対象——商品形態そのもの——と本来的には無関係なすべての関連は無視されなければならないので、もっぱら使用価値の面からする商品の考察は簡単な説明ですませることができるし、簡単にすませる必要もある。マルクスが、『経済学批判』ではそれとしてのべているように、「社会的欲望の対象であり、したがってまた社会的関連のなかにあるのであるが、にもかかわらず、使用価値はすくも社会的生産関係を表現しない。」(⑫ 一五頁) すなわち、使用価値それ自体としては、何等の社会的生産関係をもあらわすものではないのである。

それではなぜ、商品形態そのものの分析において、使用価値の面からの考察が交換価値の面からの考察に先行しているのだろうか？商品の交換価値は決して宙にういているようなもの

でなく、必ず使用価値によって担われるものだからである。

「諸使用価値は、富の社会的形態がどうであろうとも、富の素材的内容をなしている。われわれによって考察されるべき社会形態においては、それらは同時に交換価値の素材的担い手をなしている。」(⑬ 一五頁) 商品形態そのものの考察においては、使用価値は交換価値の担い手としてのみ意義をもっている。(使用価値の面からする商品の考察も、『経済学批判』から『資本論』現行版へと敘述が変更されてきている。その間の事情を検討することは、本稿では省略する。)

〔補説1〕 宇野弘藏教授の『価値論』(河出書房刊)の二「価値論の対象と方法に関する二三の注意」の(一)は「商品における使用価値」と標題されている。そこでは、つぎのように書きだされている。(八) Vの中は宇野教授による訳文である。以下同様。)

「△商品は先づ外界の一対象物である、その諸性質によって人間の何らかの欲望を満足せしめるところの一つの物であるVというのが、マルクスの商品に対する第一の規定であるが……卒直に云って私は、此の出発点が、第一章を『商品』を以て始める『資本論』の方法として妥当するかどうかという問題に疑問を持たざるを得ないのである。」(二六頁) 以下、宇野教授は、マルクスの『資本論』にたいする「疑問」のゆえん、つまり、『資本論』への批難をるるべられるのである。ところで念のためにいえば、宇

野教授の引用された右のマルクスの一文は、その二要因のうちの一つである使用価値の面から商品を考察しはじめ書き出しの一文である。ところが宇野教授は、この一文が「マルクスの商品に対する第一の規定である」といわれ、『資本論』にたいする誤った批難の踏石としておられるのである。すなわち、マルクスはそういうけれど、という意味で宇野教授はつぎのようにいわれる。

「商品は先づ何よりも第一に価値であり、総べて質的には一様で単にその量を異にするものにはすぎないということ、吾々が商品の価値が如何なる性質を有するものであるか、その量が異るとは如何にして生ずるか、此等一切のことに關しては、猶ほ全然知ることのないものとしても、日常の経験からいっても当然のこととして認められるところと云えるであらう。」(二七頁)

宇野教授は、商品はまず第一に——使用価値ではなくて——価値であるという考えを強調される。たとえば、著書『経済原論』(岩波書店刊)でも、マルクスが『資本論』で「商品の二要因——使用価値と価値」としているのに對抗して意識的に「商品の二要因——価値と使用価値」としておられる。それは、明らかに誤った主張であらう。なんとなれば、マルクスものべているように、「物は価値であることなしに使用価値でありうる」し、「いかなるものも使用対象であることなしに価値ではありえない」(●一三三)

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」p. 133

「一三三頁」からである。商品の価値は、必ず使用価値によって担われるのであり、その逆に、使用価値が商品の価値によって担われるのではないからである。簡単にいえば、使用価値あつての価値であり、価値あつての使用価値ではない。物は「先づ何よりも第一に」使用価値であり、そのうえさらに——価値をもつことによつて、はじめて商品となるのである。あえていうなれば、右にのべた意味において、「商品は先づ何よりも第一に使用価値」なのである。

また、「商品は先づ何よりも第一に価値である」ことが「日常の経験からいっても当然のこととして認められる」というのは、価値の現象形態たる交換価値と、交換価値の本質たる価値とを、まったくとりちがえている以外のなものでもないだろう。商品が交換価値をもっていることは、まさに「日常の経験」からしても認められる。だが、「商品が価値である」ということは、その交換価値の分析——抽象力を極度に緊張させての分析——を通してはじめて認識されるのである。宇野教授は、商品の交換価値と価値とが、直接には同一でありえないという事実の重大性に、すこしも考えおよばれないのであらうか。

宇野教授はつづけていわれる。

「勿論、商品が外界の一对象として、而も人間の間何等かの種類の慾望を満足せしめるところのV物であると

いことは疑うことの出来ない事実である。しかし商品が斯くの如き使用価値であるということは、商品をして商品たらしめるものではない。」(二七頁)

商品が使用価値をもっているということは、「商品をして商品たらしめるもの」であると、誰かがいっておるのであるか。すくなくともマルクスは、商品のありのままの自然的姿は使用価値の形態であること、商品が商品であるためには、そのうえさらに価値の形態をもたねばならぬこと。すなわち、労働生産物をして、とくに商品たらしめるものはまさに価値の形態であることは力説していても、その逆に、商品をして商品たらしめるものは商品の使用価値であるなどは、どこにもいっていないのである。

宇野教授はつづけていわれる。

「それは商品が生産物と共通に有する性質である。したがって吾々は、商品の使用価値をそのまま抽象して単なる使用価値としての規定を与えられたからといって、商品に關しては猶ほ何等の規定をも与えられたことにはならぬ。」(二七頁)

さきにみたように、宇野教授によれば、「商品は先づ一対象物である、その諸性質によって人間の何等かの種類の慾望を満足せしめるところの一つの物である」というのが、マルクスの商品に対する第一の規定である」ということであつた。そして、その、宇野教授が「マルクスの商品

に対する第一の規定」といわれるものは、宇野教授によれば、「商品の使用価値をそのまま抽象して単なる使用価値としての規定を与え」るものであると理解されているようである。鈴木鴻一郎教授によれば、その点がもつとはつきりのべられている。すなわち、『資本論』の当該個所で使用価値の面から商品が考察されている部分に關連し、鈴木教授は、宇野教授の所説を支持してつぎのようにいわれる。

「ここでは、商品が、まず『経済学批判』にいわれる使用価値としての使用価値√として、いいかえれば八経済的形態規定にたいして無關係な使用価値√としてとりあげられているといつてよいが、……」(『マルクス経済学』弘文堂刊・三七頁)

なるほど、マルクスは、『資本論』頭章のはじめの部分で、使用価値についての考察をのべている。しかしそれは、使用価値が商品の二つの要因のうちの一つをなすからにはかならない。だが『経済学批判』でそれとしてのべられているように、「……経済的形態規定にたいして無關係な使用価値、すなわち使用価値としての使用価値は経済学の考察範囲の外側にある。」(●一五—一六頁)のである。ところが、マルクスが、これほどはつきりのべているにもかかわらず、鈴木教授は、「ここでは、(マルクスにより——大木)商品が、まず……八経済的形態規定にたいし

て無関係な使用価値 $\vee$ として、とりあげられているといっ  
てよい……」といわれるのである。つまり、マルクスは、  
商品の一要因は使用価値であり、資本主義社会で使用価値  
は交換価値の担い手であるとのべているのに、鈴木教授  
は、これを、マルクスは商品の商品であるということに無  
関係な使用価値としてとりあげているのだ、と解されるの  
である。この鈴木教授の理解は、マルクスのいっているこ  
とをすっかり顛倒させ、かつ、まるで曲解したものにほか  
ならないであろう。

宇野教授のばあいにしても同様である。すなわち、宇野  
教授の引用しておられるマルクスの一文は、簡単にいえ  
ば、商品はまず第一に有用物であるということである。か  
りそめにも、「商品の使用価値をそのまま抽象して単なる  
使用価値としての規定」などしていないし、また、するは  
ずもないのである。「商品は、さしあたり、その諸属性に  
よって人間の何らかの種類の欲望をみたすところの物であ  
る」という書き出しの一文は、なかに使用価値についての  
考察をはさんで、「われわれによって考察さるべき社会形  
態においては、諸使用価値は同時に交換価値の素材的担い  
手をなしている」という一文と対応し、商品の一要因は使  
用価値であり、資本主義社会で使用価値は交換価値の担い  
手であることをのべているのである。

宇野教授はこうもいわれる。

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」216p

「……商品の交換価値の担い手としての使用価値とい  
うことになる、それは決して単なる使用価値ではない。  
聊か煩瑣な云ひ方になるが、斯かる使用価値は已に商品の  
価値を前提とするものとしなければならぬ。」(二八頁)  
右の宇野教授の一文は、単なる文章としてみても、全く  
無意味な同義反復にすぎない。「商品の交換価値の担  
い手としての」という限定を予めつけておけば、その限定  
自体が、それは「単なる使用価値ではない」ことまた、  
「商品の(価値ではなく——大木)交換価値を前提するも  
の」であることを予定するものにほかならないからであ  
る。ところが、この、それ自体としては無意味な同義反復  
も、宇野教授にあつては、マルクスへの批難をひき出す枕  
言葉となつていようである。すなわち、宇野教授はいわ  
れる。

「単なる使用価値そのものが交換価値の担い手となるわ  
けではないのである。」(二九頁)

「単なる使用価値そのもの」という宇野教授の言葉その  
ものが、「交換価値の担い手となるわけではない」という  
意味を、予め含ませられているのではなからうか。これま  
た、完全な同義反復である。しかるに宇野教授は、これほ  
どまでにしても、マルクスが「単なる使用価値そのものが  
交換価値の担い手となる」などと、どこかで主張している  
とてもいわれたいであろうか。

### 三、交換価値の面からの商品の分析

#### —— 価値の誘導 ——

それでは、交換価値の面からする商品の分析について、価値が誘導されるまでを見てみよう。

「……商品に内的な、内在的な交換価値というものは一つの自家撞着に見える。」(第一・二版、㊸一五頁) と指摘した後、『資本論』初版ではつぎのようにのべている。

「個々の商品、たとえば、一クオーターの小麦は、さまざまな比率で他の品物と交換される。しかしながら、その交換価値は、 $x$ 量の靴墨、 $y$ 量の絹、 $z$ 量の金等々で表現されても、依然として不変である。だから、それは、このようなそのさまざまな表現様式とは区別されなければならない。」(㊸二三頁) これに対応する『資本論』現行版での敘述は、つぎのようになっている。

「ある商品、たとえば一クオーターの小麦は、 $x$ 量の靴墨と、あるいは $y$ 量の絹と、あるいは $z$ 量の金等々と、要するに、さまざまな比率で他の諸商品と交換される。だから、小麦はある唯一の交換価値をではなく、多様な諸交換価値をもっている。しかし、 $x$ 量の靴墨も、 $y$ 量の絹も、 $z$ 量の金等々も、同じように一クオーターの小麦の交換価値であるのだから、 $x$ 量の靴墨、 $y$ 量の絹、 $z$ 量の金等々は、相互に代替せられる、または、互いに等しい大きさの諸交換価値でなければならぬ。

そこで第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値はある等しいものを表現しているということになる。それから第二に、交換価値は、総じてただ、それとは区別されるある内実の表現様式であり、『現象形態 (Die, Erscheinungsform)』でありうるにすぎないということになる。」(㊸二六頁)

初版のばあい、「それ(一クオーターの小麦の交換価値——大木)は、このようなさまざまな表現様式と区別されなければならない」という一つの結論をひき出している。初版では、所与の例において、一クオーターの小麦の交換価値は $x$ 量の靴墨、 $y$ 量の絹、 $z$ 量の金等々によって表現されるが、やはり依然として、それらの諸表現様式とは別に一クオーターの小麦の交換価値があるのだということを強調している。この初版における交換価値概念の用法は現行版での用法とは異なっていることに留意されることが必要である。そこにいう一クオーターの小麦の交換価値なるものは、他の品物によるさまざまな諸表現形態とは区別されたもの、すなわち、マルクスのいわゆる「商品に内的な、内在的な交換価値 (Ein der Ware innerlicher, immanenter Tauschwert)」にはかならない。だがしかし、他方からすれば、右の所与の例において、 $x$ 量の靴墨、 $y$ 量の絹、 $z$ 量の金等々はいずれも一クオーターの小麦の交換価値なのであって、 $x$ 量の靴墨、 $y$ 量の絹、 $z$ 量の金等々、要するに一クオーターの小麦の諸交換価値によって表現されるものは一クオーターの小麦の交換価値ではありえず、交換価値とは区別



された、かつ、交換価値として必然的に表示される一クォーターの小麦に内在するある物にほかならない——かくして、一つの自家撞着が生ずる——と思われるかもしれない。実際、マルクスみずからもいうように、「商品に内的な、内在的な交換価値」とは「一つの自家撞着 (Ein Widersinn)」のように思われるのである。そして『資本論』初版では、この「商品に内的な、内在的な交換価値」とは、実は何であるかということがつきに考究されることとなるのである。

『資本論』現行版では、つきに究明さるべきもの——諸交換価値という現象形態<sup>(2)</sup>において現象する本質たりうべきものが、「ある等しいもの (Ein Gleiche)」<sup>(2)</sup>「ある内実 (Ein Gehalt)」としてとらえられている。すなわち、諸交換価値との関連において、と同時に、諸交換価値というそのさまざまの表現様式と区別されてとらえられている。その「ある等しいもの」「ある内実」はどのようなものであるか——いかなる実体からなるものであるか——はいまだ究明されておらず——「ある等しいもの」「ある内実」が在るということもまだ確認されていない)——ひきつづいてつきに究明さるべきものである。

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」について

(2) その必然的な現象形態でありうるにすぎない本質が、いまだ究明されていない、したがって、本質との必然的な関連もいまだ明らかにされていない現象形態であることを叙述の形のうえでも示唆するために、現象形態という用語に<sup>22</sup>をつけたのである。

(3) 本文中で闡説した以外に、『資本論』初版および現行版の当該箇所の間には、つぎの相違点を含んでいる。すなわち、考察の所与の対象をなす商品が、初版では「個々の商品 (Eine einzelne warre)」とされ、現行版では「ある商品 (Eine gewisse Ware)」とされている。この商品は、所与の、かつ、任意の一商品である。したがって、現行版における方が、より適切な用語になっていると思われる。また、初版では、「商品が他の品物 (Die Artikel)」と交換されることになっているのにたいし、現行版では「他の商品 (Die Waren)」と交換されることになっている。これは、本文中で説明したような行論の仕方の相違からきているものと思われる。(より以上の立入った説明は省略する。)

『経済学批判』では、『資本論』第一・二版の右の部分に対応するところがつぎのようになっている。

「交換価値は、さしあたり、諸使用価値が相互に交換せらるる量的関係としてあらわれる。このような関係においては、諸使用価値は同一の交換量をなしている。……交換価値としては、ある使用価値はそれが適当な量で存在していさえすれば他の使用価値とちょうど同じだけの値うちがある。……それらの

自然的な存在様式とはまったく無関係に、また、それらがそのための使用価値たる慾望の特殊な性質にもかかわらず、諸商品は一定の量においてはあい等しく、交換で互いにおきかえられ、等価物として通用し、こうして、その多様な外観にもかかわらず同一の統一体 (Die Einheit) を表示している。

「使用価値は直接には生活手段である。だが逆に、これらの生活手段そのものは社会的生活の生産物であり、支出された人間の生活力の結果であり、対象化された労働である。社会的労働の物化したものとしては、すべての商品は同一の統一体の結晶である。この統一体の、すなわち、交換価値で表示される労働の一定の性格がいまや考察されなければならない。」(一六頁)

見られるように、『経済学批判』では、諸商品が互いに等しいとされる関係において「同一の統一体」が表示されているとし、「社会的労働の物化したものとしては、すべての商品は同一の統一体の結晶である。」とのべられている。

いうまでもなく、商品を生産する労働は、直接には、私的労働としておこなわれる。『経済学批判』での表現によれば、「交換価値においてあらわれる労働は、個別化された個人々の労働として前提されている」(一三三頁)のである。しかし、商品生産が一つの社会的生産でありうるためには、私的労働としておこなわれるところの商品を生産する労働が、何らかの契機によって、社会的労働とならなければならない。商品生産者達は、彼

等の生産物の交換関係を通して、はじめて社会的関連にたち入るのであるから、直接には私的な商品を生産する労働は、それが対象化された生産物の交換関係を通して、はじめて社会的労働としての定在をうるのである。すなわち、商品は使用価値としてはまさに千差万別であるにもかかわらず、「同一の統一体の結晶」という形態において社会的労働の産物となるのであり、こうしてのみ、はじめて、商品生産者達の労働は社会的統一性を獲得し、商品を生産する私的労働は社会的労働となるのである。だから、「社会的労働の物化したものとしては、すべての商品は同一の統一体の結晶である」とするよりも——もしそれをここでいう必要があるならば——むしろ、「すべての商品は、同一の統一体の結晶」としては「社会的労働の物化したもの」であるとさるべきではなからうか。さらにつけ加えるならば、『資本論』でいうように、「人々が、彼等の労働生産物を諸価値として相互に関連させるのは、これらのものが彼等にとって同種の人間の労働の単なる物的外被としてみなされるからではない。逆である。彼等は、彼等の異種の生産物を互いに交換において価値として等置することにより、彼等の相異なる諸労働を、互いに人間の労働として等置するのである。彼等はそのことを意識しないが、それをおこなうのである。」(一七四頁)

しかしながら、商品を生産する私的労働が、いかにして、社会的労働になるか、また、商品を生産する私的労働が社会的労働

となるためには、なぜ、価値においてみずから表示しなければならぬのかということ、『資本論』においても『経済学批判』においても、まだここでの直接の問題ではない。それらは、それぞれ——『資本論』現行版でみれば——第一章の第三・四節においてとりあげられる問題である。

『経済学批判』では、つぎに究明されるべきものが、「この統一体の、すなわち、交換価値で表示される労働の一定の性格 (Der bestimmte Charakter dieser Einheit, d. h. der Arbeit, die sich im Tauschwert darstellt)」であるとされている。すなわち、『経済学批判』においては、商品を生産する私的労働が社会的労働となるためには、必然的にそれによって媒介されなければならない社会的に特有な契機たりうるものが明確に問われることのないままに交換価値で表示される労働の一定の性格がつぎに究明されるべきものとして位置づけられるのである。

すでにのべたように、商品を生産する労働は、直接に労働自体としては社会的統一性をもちえない。商品を生産する私的労働は、それが対象化された生産物の特定の社会的性質という形態に媒介され、それを契機としてのみ、はじめて社会的統一性をもちうるのである。だから、「交換価値で表示される労働の一定の性格」を究明するためには、その「労働の一定の性格」が、その形態においてのみ表示されうる「交換価値」を究明しなければならぬのではなからうか。

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」について

ところで、交換価値の面から商品を考察するにあたって、『資本論』(第一・二版)は、なぜ、ある商品がさまざまな比率で他の諸商品と交換される事態を想定し、その考察からはじめているのであろうか。

思うにこれにたいしては、そこで想定されている事態は、一商品がその他の諸商品と交換されるという、理論的に想定された商品世界での事態を、所与のものとしてうけとっているのであるといつて答えらるべきであろう。商品世界では、諸商品が互いに商品として対立しあい、そして交換される。こうした商品世界における諸商品の関係は、これを一商品においてみるときは、その一商品とその他の商品とが交換されるという関係にほかならない。だから、商品と交換価値の面から考察するにあたって——唯物論的方法からして当然にも——理論的に想定された商品世界のあるがままに、一商品がさまざまな比率で他の諸商品と交換される事態を想定し、その考察からはじめられているのであろう。

『資本論』初版においては、そのさまざまな諸表現とは区別された一商品の交換価値、すなわち、その商品に内在する交換価値は何であるかを、まず二商品の等置関係において追求する。『資本論』現行版においてもまた、多様な諸交換価値によって表現され、交換価値とは区別されうる一商品のある内実は何であるかを、二商品の等置関係において追求しはじめ。その追究は、それが「現象」する商品交換関係を、もっとも簡単

な構成要素<sup>11</sup>二商品の交換関係に還元したうえでなされているのである。

こうして、『資本論』(第一・三版)では、二商品間の等置関係について分析を進める。すなわち、何が、二商品を等置関係におくのか? 二商品を互いに等しいとするものは何か? 両者に共通なものは何か?

### 1 オーターの小麦 = a ツェントネルの鉄

「この方程式は何を意味するか?」——『資本論』初版はいう——「同一の価値 (Derselbe Wert) が、二つの相異なる物のうちに、すなわち、一クォーターの小麦のうちにも、また a ツェントネルの鉄のうちにも存在するということである。だから両者は、それ自体としては両者のいずれでもないある第三者に等しい。だから両者のそれぞれは、それが交換価値であるかぎり<sup>4</sup>は、他方のものから独立に、この第三者に還元しうるものでなければならぬ。」(巻二四~二五頁)

『資本論』初版では、ここですでに価値概念が登場している。二商品の等置という事実から直接に、すなわち、二商品が交換にさいして等置されるということは、とりもなおさず、両商品のうちに同一の価値があるということなのだとして価値概念が姿をあらわしている。しかしながら、価値という概念が登場したからといって、そのことだけでもって価値が誘導されたことにはならないし、価値が認識されたことにもならない、価値を誘導するとか価値を認識するということは、価値を価値た

らしめるもの、すなわち、価値を形成するもの・価値の実体を明らかにして価値を把握すること、つまり、価値を価値として認識することでなければならぬ。

他の品物による「そのさまざまな表現様式とは区別される」交換価値、すなわち、「商品に内的な、内在的な交換価値」は、ここで「同一の価値」とされている。だが、ただ呼び方をかえ、名称を新たに附されただけにとどまるならば、それは一種の同義反復たらざるをえないこととなるであろう。だから『資本論』初版では、右のようにして価値概念が登場した後、追って価値の実体が究明されていくのである。ところで、この『資本論』初版における「同一の価値」が、現行版では「同じ大いさをもつある共通物」となっている。現行版では、つぎのようにべている。

「同じ大いさをもつある共通物が、二つの相異なる物のうちにすなわち、一クォーターの小麦のうちにも、また a ツェントネルの鉄のうちにも存在するということである。だから両者は、それ自体としては両者のいずれでもないある第三者に等しい。だから両者のそれぞれは、それが交換価値であるかぎり<sup>4</sup>は、この第三者に還元しうるものでなければならぬ。」(巻二一六~二一七頁)

(4) 「他方のものから独立に」というこの一句は初版だけのものであり、現行版では消されている。現行版で、これが消されなければならなかった確たる理由は考えあたらぬ。ここにいう「あ

る第三者」が、それ自体としては、等置される両商品のいずれでもないとするのべられておるのだから、この一句はなくてはなかつてもよかつかえないと考えられたからではなからうかと推測される。しかし、同様の理由から、初版では、どうしてもこの一句が必要であつたとも思われぬ。いずれにせよ、この一句のあるなしに重大な意味はないだろう。

さらにさきを見てみよう。

「諸商品の諸交換価値は、それらが、あるいはより多くを、あるいはより少くをあらわしているある共通物に還元されなければならぬ。」(第一・二版、②一七頁)

ひきつづき、『資本論』初版では、つぎのようにのべている。

「交換価値の実体 (Die Substanz des Tauschwerths)

が、商品の物理的な・手でつかみうる存在、あるいは、使用価値としての存在とはまったく異なつたものであり、かつ、独立のものであることは、商品の交換関係を見すればわかることである。その交換関係は、まさに使用価値の捨象によつて特徴づけられている。すなわち、商品はそれが適当な比率で存在していさえすれば、どの他の商品ともまったく同様である。」(②二五頁)

二五頁)

『資本論』現行版では、つぎのようにのべられている。

「この共通物は、諸商品の幾何学的、物理学的、化学的その他の自然的属性ではありえない。諸商品の物理的諸属性は、総じて、それらが商品を有用にし、したがつて使用価値にするか

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」にひびく

ぎりでしか問題にならない。ところが他方、諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに使用価値の捨象なのである。この諸商品の交換関係の内部においては、ある使用価値は、しかるべき比率で存在していさえすれば、どの他の使用価値ともまったく同じに通用する。……」(②一七頁)

現行版では「共通物」についての考察が進められているのにたいし、初版では「交換価値の実体」についての考察が進められている。初版でのその交換価値は、その他の品物による「それのさまざまな表現様式とは区別されうる」交換価値であり、すでに「同一の価値」と呼ばれたものである。価値概念が登場した後、初版では、こうして価値の実体の究明が進められているのである。だから、初版では「交換価値の実体」についての、現行版では「共通物」についてのそれぞれの考察が進められているのは、両版での異なつた説明の仕方による異なつた段どりであるといえよう。先走つていえば、現行版にいうこの「共通物」は、やがて商品価値であるときとめられるものである。ここでは、両版が互いに似通つた叙述でありながら、そこにおいて考察されている「交換価値の実体」および「共通物」は、単に呼び方が異なっているだけでなく、内容的にも、互いに異なつたものであるということに留意するべきであらう。

『資本論』初版においても、現行版におけると同様、諸商品の交換関係は使用価値の捨象によつて特徴づけられていること

が指摘されている。しかしながら、それは、それだけの指摘にとどまっているのであって——現行版におけるがごとく——商品の交換関係の内部でおこなわれている使用価値の捨象についてのよりたち入った追究はおこなわれていない。

それでは、こんどは現行版の方からつづきのところを見ていく。

「さて、諸商品体の使用価値を度外視すれば、それらには、まだある属性だけが、すなわち労働生産物であるという属性だけがのこっている。けれども、われわれにとってもまた、その労働生産物はすでに手の中で転化されている。労働生産物の使用価値を捨象すれば、吾々はまた、労働生産物を使用価値たらしめている物的諸成分や諸形態をも捨象することになる。……労働生産物のあらゆる感覚的性質が拭いさられている。……労働諸生産物の有用的性格とともに労働生産物に表示されている労働の有用的性格が消えうせ、それ故にまた、これらの労働の具体的諸形態も消えうせ、それらの労働はもはや区別されることなく、ともに同等な人間の労働、抽象的人間の労働に還元されているのである。」(⑤一一八頁)

『資本論』現行版では、諸商品の等置関係における使用価値の捨象という客観的な事実がどういう意味のものであるのかについて独特の分析をおこなっている。この分析と説明は初版にはなく、『資本論』現行版に独自のものであり、おそらくマルクスが、初版から第二版への改訂にさいして、価値の誘導を

「科学的により厳密に遂行する」ための苦勞をもっとも集中させた一個所ではないかと思われるのである。だがしかし、この説明法は、由来、価値の誘導にかんする疑問や批難や曲解が集中したところでもある。

使用価値としてはさまざまに異なっている諸商品の同等性が、ただ諸商品の不等性<sup>II</sup>使用価値の捨象によってしか抽象されえぬことは明白である。しかしながら、商品が交換にさいして、等置されるということ、そして、等置されることによって商品相互の不等性が捨象されるということは、われわれの認識如何に依存しない客観的な事実でもある。だからこそ、等置にさいしての諸商品の使用価値の捨象、商品に内在的な共通物への還元というこの客観的事実が、これに対応する思维的抽象によって、理論的に把握されるのだし、また理論的に把握されなければならぬのである。一般に、経済学的分析のさいにおこなわれる思维的抽象と、その対象をなすところの所与の客観的事象における抽象とは、厳に区別されるとともに正しく関連させて論じられなければならない。

(5) なお、この点については、『資本論研究』至誠堂刊・八八頁、九八頁とくに九六頁以下における久留間敏造教授の発言部分を参照されたい。

現行版において使用価値の捨象ということのたち入った考察によってまず発見されるものは商品価値ではなく、(その点に留意される必要があると思う)「共通物」を形成する実体とし

ての抽象的人間の労働である。そしてこの後、ひきつづき、抽象的人間の労働がその社会的実体として生産物に対象化された形態にたいして、商品価値という名称が附されるのである。すなわち、『資本論』現行版は、つづけてつぎのようになっている。

「さて、労働諸生産物のこのったものを考察しよう。それらに残留しているものは、同じまぼろしのような対象性にほかならず、無区別な人間の労働の、すなわち、その支出の形態をかえりみない人間の労働力の支出の単なる凝結物にほかならない。これらのものは、もはや、それらの生産に人間の労働力が支出され、人間の労働が堆積されているということを表示するにすぎない。このような、それらに共通な社会的実体の結晶として、それらは諸価値——諸商品価値である。」(㉔一一九頁)

それでは、『資本論』初版でのつづきをみてみよう。「商品は、それが適当な比率で存在していきえすれば、他の商品ともまったく同様である。」とのべた後、初版は、こういっている。「だから、諸商品はそれらの交換関係から、あるいはそれらが交換価値としてあらわれる形態から独立に、まず、単に価値として観察されるべきである。」(㉔二六頁)

そして初版では、ここにつぎの註記をしている。「われわれが、今後“価値”という言葉を用いた規定なしに用いるときは、それはつねに交換価値について論じているのである。」(㉔二六頁)

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」(二七二頁)

これは、ある意味で、一見不可解なものと思われるかもしれない。すなわち、せっかく交換価値から独立したものととしての商品の価値についてすでに言及しておきながら、また、諸商品は「それらが交換価値としてあらわれる形態から独立に、まず、単に価値として観察されるべきである」とのべたところで、なぜこのような註記が必要であったのかという疑問が生ずるかもしれない。

もちろん、この註記は、今後「価値」という言葉を用いるとき、それは使用価値を指すものではないことを断っているものである。がそれと同時に、この註記にかんしては、さらにつきの点に再び留意する必要があるかもしれないのである。つまり、すでに見てきたごとく、これまで、『資本論』初版では、交換価値というとき、それは、他の品物による「そのさまざまな表現様式とは区別されうる」交換価値のことであり、いわば「商品に内的な、内在的な交換価値」であったのであり、そしていま、右の註記でいわれている交換価値——すなわち、今後特別の規定なしに価値といわれるばあいには該当する交換価値——は、右と同様の意味でのものであるという点である。これにたいして、この本文中にいわれている交換価値——すなわち、諸商品が「交換価値としてあらわれる形態」といわれているさいの交換価値——は、右にいう交換価値とは区別されうる「そのさまざまな表現様式」のこと(つまり、『資本論』現行版での用語法に一致する交換価値)なのである。

初版においては、等置される諸商品に共通なものは、すでに、同一の価値であるとされている。だから、価値の実体をなすものは、価値そのものの考察によって究明される。すなわち、『資本論』初版はつづけていう。

「使用対象、あるいは、財としては、諸商品は物体的に相異なるものである。それらの価値存在 (Das Wertsein) は、これに反して、それらの統一体を形成する。この統一体が生れるのは自然からではなくて社会からである。さまざまな使用価値においてさまざまなみあらわれるところの、その共通な社会の実体は——労働である。」(●二七頁)

こうして、『資本論』初版では、価値そのものの考察において、価値の社会的実体は労働であることを発見する。現行版におけるような、使用価値の捨象というたち入った考察によってとは別の仕方では価値の社会的実体を発見するのである。しかしながら、価値の実体であるとされる労働は、抽象的人間的労働としてはまだ叙述されていない。

もっとも、『資本論』初版では、価値の社会的実体は労働であることを究明した後、それにひきつづいて、いわゆる複雑労働の単純労働への還元が考察されている。すなわち、

「価値としては、諸商品は結晶した労働以外のものではない。労働そのものの計量単位は単純な平均労働である……」

(●二八頁)

もしかして、これが価値を形成する労働の質についての考察

であるとうけとられるかもしれない。なるほど、単純な平均労働でなければならぬということは、諸価値の統一体を形成する労働の一つの質的規定であるが、それは価値の大きさのみに関する規定なのである。「だが、諸価値の統一体を形成する労働は、たんに等しい、単純な、平均労働であるばかりではない。労働は、一定の生産物に表示されている私的個人の労働である。ところが、価値としては、生産物は社会的労働の体化でなければならぬ……」(『剰余価値学説史』第三巻・研究所版・一三四頁)『資本論』初版においては、価値を形成する社会的実体としての労働にかんする質的規定が、当面欠けているのである。

(6) 価値を形成する社会的実体としての労働の質的規定は、初版のばあい、商品で表示される労働の二重性格についての考察に移ってから叙述されている。

それでは、つぎに、『経済学批判』を見てみよう。『資本論』現行版で、二商品の等置関係をとりあげての分析以来、商品価値が認識されるにいたるまでのところに対応した『経済学批判』での叙述は、つぎのようになっている。

「一オンスの金、一トンの鉄、一クォーターの小麦、二〇ヤールの絹が等しい大きさの交換価値であるとしよう。それらの使用価値の質的区別がそこにおいては拭いさられているところのこのような等価物としては、それらのものは同一の労働の等



しい量を表示している。それらのものに均等に対象化されている労働は、まったく同じ形の、無差別な、単純な労働でなければならぬ。……実際、物的には使用価値の差別としてあらわれるものが、過程的には使用価値をつくりだす活動の差別としてあらわれる。だから、交換価値を生み出す労働は、使用価値の特殊な素材にたいして無関心であると同様に、労働そのものの特殊な形態にたいしても無関心である。そのうえに、さまざまな使用価値はさまざまな個人の活動の生産物であり、それゆえに、個人的にはさまざまな労働の結果である。だが、交換価値としては、それらのものは、等しい、無差別な労働を、すなわち、そこにおいては労働する者の個性が拭いさられている労働を表示している。だから、交換価値を生み出す労働は抽象的一般的労働である。」(巻一七頁)

『経済学批判』は、諸商品が互いに等しい大いさの交換価値であるということのうちでは、それらの使用価値の質的区別は捨象されておとし、ひきつづき、交換価値によって表示される、もしくは交換価値を生み出す労働の同索性について詳論している。ところが、この抽象的一般的労働についての詳論は、『資本論』初版では見られない。おそらくこの点は——マルクスが『資本論』初版への「序文」で書いているところの——『経済学批判』では詳論され、『資本論』初版ではただ暗示されるにとどまっている点の一つなのであろう。そして、この抽象的一般的労働についての詳論は、『資本論』初版から第二版

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」でひら

への改訂にさいし、より改善のうえとり入れられたものと考えられるのである。

他方、『経済学批判』では、商品を生産する労働の抽象的一般的側面が明らかにされながらも、結局、交換価値とは厳密に区別された価値の把握へ到達することができなかったのである。すでに見てきたように、交換価値と厳密に区別された価値の把握は、『資本論』初版において達成されている。この点は、『経済学批判』では暗示され、『資本論』初版ではさらにすすんで展開されているとされている点の一つなのであろうか。

(7) 価値(『経済学批判』の用語でいえば交換価値)を形成する労働の抽象的一般的性格についての「暗示」が、『資本論』初版のどこにあるのかと問われるならば、それは、価値の社会的実体は労働であることを指摘するにあたっておこなわれている説明の部分、すなわち、「諸商品の価値存在は、……それらの統一体を形成する。この統一体が生れるのは自然からではなくて社会からである」という箇所を、第一にあぐべきではないかと思う。

(8) 交換価値と区別された価値の把握が、『経済学批判』のどこに「暗示」されているのかという問いにたいして答えることはむずかしい。

『経済学批判』で、「交換価値を生み出す労働は抽象的一般的労働である。」といわれているばあいの交換価値は、いかなれば商品に内在的な交換価値なのであり、『資本論』では価値とよばれているものである。『経済学批判』を書いた当時のマルクスは、

それを本来は価値とすべきであることを承知しながら、わざわざ交換価値としておいたものではなからう。いわば、意識的に暗示する (anduten) つもりで交換価値としたのではあるまい。とすれば、後にはじめて『資本論』で明確に展開される右の点が、『経済学批判』のどこに「暗示」されていたのかと問うことが、もともと無理なのであろう。『経済学批判』では、曖昧だったのである。

『資本論』初版を書くとき、マルクスは、『経済学批判』で詳論されたいいくつかの点をただ暗示するにとどめた。『資本論』初版は、その意味で『経済学批判』と相互補完の関係にある。『資本論』現行版のばあいは、これにたいして、それ自身で自足的な著作であり、初版および『経済学批判』からとり入れられた箇所も捨てられた点も、——マルクスの考えでは——それぞれ、そうあるべくしてそのように取扱われたものであろう。価値が誘導されるまでの部分についていえば、そのいちいちについて見てきたごとく、『資本論』初版および現行版での考えは、基本的に一致している。相違は、ほとんどが論証の仕方・説明の仕方での相違である。(説明の仕方の相違を、用語のうちでもっとも特徴的に示しているものは、交換価値概念の用法であった。)そしてその敘述は、幾多の点で、初版から現行版へと改善されている。交換価値と価値との区別および関連についていえば、その敘述は、現行版の方がより確然として明示的であるといえよう。だがしかし、価値の誘導へいたるまでのすべ

ての敘述の仕方が、現行版においては初版におけるよりもすぐれていると一概に断定できないのではなからうか。すなわち、たとえば、現行版では、使用価値の捨象を通して、まず、抽象的人間的労働を発見している。そしてそのさい、抽象的人間的労働は互いに区別されえない同等な人間の労働であると説明されている。だが、抽象的人間的労働が社会的なものであることは、むしろ、その後につづく価値の規定にさいして、よりはっきりとおこなわれている。これにたいし、初版では、価値の社会的実体の規定にあたって、「諸商品の価値存在は……それらの統一体を形成する。この統一体が生れるのは自然からではなくて社会からである」と、簡潔に——おそらく意識的に簡潔に——ではあるが直截に説明をくわえている。これらの両者を比較するとき、説明法として、初版における説明のほうがより説得的であるばあいもあるのではなからうか。また、価値が誘導されるまでの順序として、初版では交換価値から出発してまず価値、それから価値そのものの考察において価値の実体の説明となっている。これにたいし、現行版では交換価値から出発してまず価値の実体、それから価値の説明となっている。これは、単なる説明の順序であるが、その説明の順序として、むしろ初版における順序の方が客観的な抽象の過程により適合的であり、より説得力を増しうると考えられないであろうか。『資本論』現行版で、使用価値の捨象を通して価値を、ついで価値の社会的実体としての抽象的人間的労働を説くならば、現行版と

してもより説得力を増すと考えられないであろうか……等々、要するに、こうした説明法については、一概に現行版における方がよりすぐれていると断定できないと思われるのである。

〔補説2〕 宇野弘蔵教授の『経済学方法論』（東京大学出版会刊）のⅣは「資本論」における方法論上の諸問題、そのうちの(一)は「価値論の論証について」と標題されている。そこにおいて、宇野教授は、拙論が検討の対象としているのと同じところ、すなわち、『資本論』現行版の第一部・第一章・第一節を逐一検討し、マルクスがいかに間違っているかということを中心論じておられる。『資本論』現行版の当該箇所を、どう理解してはいけないかを示す一例として、検討させていたどころ。

宇野教授はいわれる。

「マルクスは、第一章の商品論で先ず△商品の二要因▽としての使用価値について若干の一般的考察をなした後に、△われわれがこれから考察しようとしている社会形態においては、使用価値は同時に交換価値の素材的な担手をなしている▽と、交換価値を通して他の△要因▽としての価値の考察に入るのである。

そしてまず交換価値が△量的な関係として、すなわちある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される比率としてすなわち時と所にしたがって絶えず変化する関係として、現われる▽点を指摘し、商品の価値は、この交換価

値の背後に、それとは異なるものであることを明らかにする。すなわち」(一七〇〜一七一頁)として、ひきつづき拙論本文中に『資本論』現行版から引用したのと同じ箇所——ある商品の諸交換価値について考察した箇所(②一六頁の第一パラグラフ)——の訳文をかかげられる。

宇野教授の理解によれば、マルクスが当該パラグラフでいおうとしていることは、「商品の価値は、この交換価値の背後に、それとは異なるものであることを明らかにすることであるそうである。だが、当該箇所、商品の価値は、まだ、それとして把握されておらず、なお、今後に追究されるべきものである。だからマルクスは、商品の価値について、直接論ずることはしていない。マルクスが、当該パラグラフで明らかにしていることは、結局、「(一商品)の諸)交換価値の背後に、それとは異なる」△(一商品)物▽があること、および、商品の交換価値は、それとは区別される△内在物▽の表現様式でありうるにすぎない、ということである。そして、やがて、この△(一商品)物▽は価値——念のためにいえば、抽象的人間的労働の結果——であることがこの後で明らかにされていくのである。

ところが宇野教授はつづけられる。

「たしかに一商品の交換価値は、種々異ったものの、異った量としてあらわれるとしても△(一つの同一物を言い表

わし $\sqrt{\vee}$ その $\wedge$ 現象形態 $\vee$ にすぎないのであって、その $\wedge$ 一つの同一物 $\vee$ こそ、その商品の価値をなすものといつてよい。(一一七頁)

宇野教授は、「たしかに……いってよい」かもしれないが、すくなくともマルクスは、まだ『資本論』現行版の当該箇所では、「その $\wedge$ 一つの同一物 $\vee$ こそ、その商品の価値」であるとはいってないし、「その $\wedge$ 一つの同一物 $\vee$ こそ、その商品の価値をなすもの」であるなどともいっていない。

宇野教授は、さらにつづけられる。

「しかしこの例解という交換価値は、後にマルクスの展開する価値形態の第二形態と形式的に同一のものとなっているのであるが、それは単に「クォーターの小麦の価値を表現する」といにとどまらず、靴墨等の $\wedge$ 他の商品と、きわめて雑多な割合で交換される $\vee$ ものとしての、交換価値でもある。」(一一七頁)

「この例解という交換価値」が、「クォーターの小麦の価値を表現する」ものであるなどと、「この例解」でマルクスはいっていない。

宇野教授の、右の後半の文章は、せいぜい「この例解という交換価値は、……多様な交換価値としての交換価値でもある」ということになるであろうか。そして、そのかぎりでは、あまり意味もないけれど、とくにまちがいで

もないであろう。

ところが、宇野教授は、つぎのようにつづけられる。

「そしてそういう意味で $\wedge$ 妥当な交換価値 $\vee$ とせられるのであるが、その点からいえば $\wedge$ x量の靴墨、y量の絹、z量の金等々は、相互におき換えることのできる交換価値、あるいは相互に等しい大いさの交換価値であるに相違ない $\vee$ などという必要は全然ない。クォーターの小麦もまた、x量の靴墨等の価値を $\wedge$ 言い表わす $\vee$ 交換価値をなすのである。」(一一七―一二二頁)

右の宇野教授の一文は、およそ、正常な読解能力をもってしては、まがりなりにも文意を汲みとることさえむづかしい。だが、強くマルクスを批判しておられることは明瞭に読解できる。そして、それにつづく「クォーターの小麦もまた、x量の靴墨等の価値を $\wedge$ 言い表わす $\vee$ 交換価値をなすのである」という一文は、その前の、マルクスにたいする強い批判の根拠を説明するものようである。だがしかし、すでに明らかなくとく、ここではまだ、商品の価値を $\wedge$ 言い表わす $\vee$ ことは、それとして問題とされていないのである。宇野教授が、マルクスにたいする批判の理由とされている一文は、マルクスのいっていることに即してみれば、全然理由にもならないものである。

したがって、ここでは、宇野教授が強く批判される、当のマルクスの文章の意義について考えてみた方がよさそう

である。

マルクスは、そこで、「小麦は……多様な諸交換価値をもっている」ということの意味を、さらにときほぐし、今度は、その「多様な諸交換価値」どうしの関係という角度から、丁寧な——とかく抽象力の行使に不慣れで理解力の低い読者にも解るように、ねんごろな——説明を加え、つづいてひきだされる二つの結論を、よりよく納得できるようにしたものである。

(なお、ここで、マルクスにたいする批難の根拠を説明している一文には、宇野教授の、価値形態論についての誤った一議論が、かたく結びついているようである。その価値形態論にかんする宇野教授の一議論については、久留間敏造教授の『価値形態論と交換過程論』岩波書店刊・とくに、その「後編・第二論点について」に論じつくされているので、参照されたい。)

〔補説3〕 宇野教授は、拙論本文中に『資本論』現行版から引用したのと同じ個所——二商品の等置関係について考察した個所(㊦二六〜二七頁)——の訳文をかかげられた後、つぎのようにいわれる。

「ここでは明らかに一クオーターの小麦の価値という八一つの同一物を言い表わしている√ものとしてのX量の靴墨とか、Y量の絹とか、Z量の金等々が八相互におき換えることのできる交換価値、あるいは、相互に等しい大いさ

『価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)』にひびく

の交換価値である√という最初の規定はなく、次ぎの△ある交換価値√の規定によって一クオーターの小麦は直ちにAツェントネルの鉄と△同一の大いさのある共通なも

の√を有し、△この第三者に整約し得る√ことになっ

てい。」(一七二頁)

右の議論は、前の部分、すなわち、ある商品が、その他諸商品と交換される関係についての考察から、例の二つの結論をひきだしている『資本論』現行版での敘述に関連して展開されている。宇野教授は、「ここでは明らかに……という最初の規定はなく」といわれるが、すでに指摘してきたごとく『資本論』現行版当該個所においては、まだ、商品の価値は価値として把握されていない。右にいう△一つの同一物√は、まだ価値として把握されるに至っていないのである。マルクスは、当然にも、当該個所では、価値を価値として論ずることをしていない。したがって、マルクスが、『資本論』の当該個所で、あたかも「一クオーターの小麦の価値という△一つの同一物を言い表わしている√ものとしての」諸交換価値について語っているかのごとくにのべることは許されぬ歪曲ではなからうか。解釈として主張するのであれば、それは誤った主張である。

また、マルクスが当該個所で書いていることを宇野教授風にいえば、「X量の靴墨とか、Y量の絹とか、Z量の金等々が八相互におきかえることのできる交換価値、あるいは

相互に等しい大きい交換価値である $\vee$ 」ので、そこで、「X量の靴墨とか、Y量の絹とか、Z量の金等々」は $\wedge$ 一つの同一物を言いあらわしている $\vee$ ということになるのである。ところが、宇野教授は、これを見事に逆転しておられる。

マルクスは、『資本論』の当該箇所において、「同じ商品の妥当な諸交換価値は、ある等しいものを表現しているということになる」という結論はひきだしているが、「一クォーターの小麦の価値という $\wedge$ 一つの同一物を言い表わしている $\vee$ ものとしての」諸交換価値をもってきて、それらについて論ずるなどはしていないのである。

こうして、宇野教授の、いわゆる「最初の規定」なるものは、せいぜいのところ、同一商品の諸交換価値相互間における関係についての規定にすぎないということになるのである。

ところで、宇野教授は、「ここでは明らかに……:という最初の規定はなく」と言われていたわけである。しかし、その、宇野教授のいわゆる「最初の規定」は、せいぜいのところ、同一の商品の諸交換価値相互間における関係についての規定にすぎないのであるのだから、ここで、直接引き合いにだされないのは当然のことであろう。ここで、いま、新しく考察されることになっているのは、二つの商品、たとえば、小麦と鉄とが、交換にさいして等置される関係

を表示する一つの方程式が、何を意味するか、ということだからである。二つの商品が、つまり、方程式の左右に別々にある二つの商品が互いに等しいとされることの意味を考察するのに、同一商品の諸交換価値——その交換関係を方程式で表示すれば、それらの諸交換価値は、いずれも一方の辺にある——相互の関係に関する規定が、直接引き合いにだされないのは当然であろう。

宇野教授は、「次ぎの $\wedge$ 妥当な交換価値 $\vee$ の規定」といわれる。マルクスが『資本論』の当該個所で、「妥当な(諸)交換価値」という言葉を使用しているのは、ただ一ヶ所、すなわち、「そこで、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は、ある等しいものを表現しているということになる。」というくだりである。おそらく、宇野教授は、このところを、不適切にも、「 $\wedge$ 妥当な交換価値 $\vee$ の規定」と称されたであろう。しかし、右の一文は、同一商品にとつての妥当な諸交換価値についていわれていることである。しかるに宇野教授によれば、『資本論』現行版では「 $\wedge$ 妥当な交換価値 $\vee$ の規定によって一クォーターの小麦は直ちにAツェントネルの鉄と $\wedge$ 同一の大きいのある共通なもの $\vee$ を有し、 $\wedge$ この第三者に整約し得る $\vee$ ことになっている。」のだそうである。これまでの説明からも明らかのように、恐らく、何人が『資本論』の当該個所を読んだとしても、よほどの予断でも持たぬかぎり、宇野教授が主

張されるようには書いてないことが判るであろう。

所与の例において、一クオーターの小麦が、(直ちに——などという言葉を、マルクスは挿しはさんでいない) Aツェントネルの鉄と「△同一の大きさのある共通なもの」を有し、△この第三者に整約し得る√ことになっている」のは、勿論、一クオーターの小麦とAツェントネルの鉄とが、交換にさいし等置されること、そのことによつてである。けつして、「△妥当な交換価値√の規定によつて」などではない。

しかし、だいたい、『資本論』の当該箇所において、二商品が「△同一の大きさのある共通なもの」を有し、△この第三者に整約し得る√ことになっている」のは、何によつてであるかというようなことは、直接問題とされてないし、また、問題とされないのが当然なのである。けだし、ここにおいては、二商品間の交換関係、等置関係、したがつて、それを表示する方程式は所与の事実なのである。そして、所与の事実たる二商品間の等置関係を表示する方程式の意味するところが問われているのである。

なお、宇野教授の訳文では、*die gültigen Tauschwerte* (妥当な諸交換価値) が、△妥当な交換価値√とされている。すなわち、△……同一商品の妥当な交換価値は、一つの同一物を言い表わしている。√かくて、宇野教授は、この一文を、「ある商品と、その商品の交換価値とは、一つ

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」といふ

の同一物を言い表わしている」というように読みとり、これは、ほかならぬ、二商品間の等置関係についていわれていることだと誤解し、そのために、「△妥当な交換価値√の規定によつて一クオーターの小麦は直ちにAツェントネルの鉄と△同一の大きさのある共通なもの」を有し、△この第三者に整約し得る√ことになっている。」とマルクスの書いていることを曲解されるに至つたのではないかとも考えられる。そうとすれば、曲解の筋も解らぬことはない。しかしながら、曲解の筋はどうあれ、宇野教授による理解が、『資本論』の、とんでもない歪曲であることにかわりはない。

宇野教授はつづけていわれる。

「いいかえればAツェントネルの鉄が一クオーターの小麦の交換価値であるということは、直ちに一クオーターの小麦は、Aツェントネルの鉄の交換価値でもあるというのである。」(一七二頁)

なるほど、二つの商品、たとえば一クオーターの小麦とAツェントネルの鉄とが交換に際し等置されるということは、Aツェントネルの鉄が一クオーターの小麦の交換価値であることでもあり、また、一クオーターの小麦がAツェントネルの鉄の交換価値であるということでもある。だが、一クオーターの小麦とAツェントネルの鉄とが、「△同一の大きさのある共通なもの」を有し、△この第三者に

「整約し得る√」ということをして、いいかえるとしても(マルクスの文章自体は、わざわざいいかえる必要もないのであるが)、宇野教授のようにすることはできないであろう。すなわち、マルクスが、ここで追究しているのは、「二商品、たとえばクオーターの小麦とAツェントネルの鉄とを等置関係におくものは何か」ということであり、それが、ここでは、「同じ大いさをもつある共通物」としてとらえられているのである。そして、この「同じ大いさをもつある共通物」について、ここで可能かつ必要な若干の説明がつけ加えられているのである。これを、宇野教授の所説にかみ合うように、敢えていいかえるならば、ここで、マルクスは、Aツェントネルの鉄をクオーターの小麦の交換価値とし、また、クオーターの小麦をAツェントネルの鉄の交換価値とするものは何かということを追究し、それを「同じ大いさをもつある共通物」として把握しているのである。だから、ここでマルクスがのべていることを、宇野教授のごとく「Aツェントネルの鉄がクオーターの小麦の交換価値である」ということは、直ちにクオーターの小麦は、Aツェントネルの鉄の交換価値でもあるというのである」などといいかえることは到底不可能なことなのである。

〔補説4〕 宇野教授は、マルクスからの引用文を、つぎのようにかかげられる。

「いままもし商品の使用価値を無視するとすれば、商品体

に残る属性は、ただ一つ、労働生産物という属性だけである。だが、われわれにとっては、この労働生産物も、すでにわれわれの手中で変化している。われわれがその使用価値から抽象するならば、(Abstrahiren wir von seinem Gebrauchswert, 〃われわれがその使用価値を捨象すれば〃)とも訳すべきである——大木)われわれは労働生産物を使用価値たらしめる物体的な組成部分や形態からも抽象することになる。……(中略——大木)……それらはもはや相互に区別されることなく、ことごとく同一なる人間労働、抽象的に人間的な労働(abstrakt menschliche Arbeit)に整約される√かくてその使用価値を捨象された商品は、△その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が累積されているということを表わしているだけである。それは、おたがいに共通なこの社会的実体の結晶として価値——商品価値である√ということになる。」(一七三頁)

そして、宇野教授は、これに対し、つぎのようにのべられる。

「たしかに商品の交換関係は、互に異った使用価値を有する商品を相等しいとするのであって、△商品の使用価値からの抽象√によって特徴づけられるものといつてよい。しかし商品は、決してその使用価値を捨象して交換されるわけではない。そしてまたあらゆる他の商品と直接的に交



換されうるものでもない。マルクス自身が後に第二章へ交換過程で詳細に考察しているように、商品の交換は貨幣を媒介にする商品流通として行われる。小麦と鉄との等式に示されるような直接的交換は、いわゆる物々交換にすぎず、むしろ商品としての交換を示すものではない。商品としての交換は、その所有者の欲する任意の商品に対して、相手が自己の商品との交換を欲すると否とに関らず、自由に行われるものでなければならぬのであるが、そうゆう関係はあらゆる商品が一樣に求めるものとしては不可能なのであって、商品中の一商品を貨幣として、商品としては逆に受動的に貨幣による購買によって、任意の他の商品との交換を、したがってまた直接的交換ではなく、貨幣による流通を通して実現することになるのである。小麦と鉄との等式の内に直ちにへ共通なものVを求めめるのは、商品交換のこの特性を無視することになる。」(一七三—一七四頁)

ことわっておくが、宇野教授も承知しておられるであろうように、マルクスがここでとりあげている問題は、諸商品相互の交換関係の特徴づけている諸使用価値の捨象ということのたち入った究明である。それはすなわち、交換にさいして等置される諸商品に共通なものは何かを明らかにするために、等置される諸商品に不等なもの使用価値を捨象しなければならぬからである。

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」にひびく

ところが、「たしかに……といってよい」という例の枕言葉の後、宇野教授は、「しかし商品は、決してその使用価値を捨象して交換されるわけではない」といってマルクスを批難しはじめられるのである。当該個所で、マルクスは、「商品は、その使用価値を捨象して交換される」とでもいっているのだろうか？勿論、そんなことについていいわししない。それでは、マルクスは直接いっていないが、ここで、「商品は、その使用価値を捨象して交換されるのか、否か？」が本来問題とさるべきことなのであるのか？すでに説明したごとく当該個所での課題からして、そんなことが、当面の問題になっていないことは明らかである。

「そしてまたあらゆる他の商品と直接的に交換されるものでもない」とマルクスを批難されるけれど、マルクスが、当該個所のいづくにおいて、「商品は、あらゆる他の商品と直接的に交換されうるものである」などと主張しているのだろうか。

宇野教授は、また、《交換過程》で究明されるべきことが、ここでまだ究明されていないとしてマルクスを批難される。商品交換が、貨幣を媒介にしておこなわれることになる必然性は、周知のように、『資本論』第二章で説明されている。宇野教授は、後になって論証するべきことが、それ以前に論証されていないといつてスジチガイの批難をマルクスにあびせられるのである。それでは、あたかも、

科学以前に科学を要求するようなことにもなりかねないであろう。

そもそも、マルクスは、当該個所において、商品をもっぱら交換価値の面から分析しているのである。したがって、ここでの商品は、使用価値との直接的統一たる商品の矛盾が、一全体として、現実には他商品に関係することによって展開する運動の過程にはないのである。

マルクスは、『経済学批判』の「交換過程論」に少し入ったところでつぎのようにもべている。

「個々の商品は、使用価値の視点のもとでは、本来、独立な物としてあらわれたが、これに反して、交換価値としては、最初から、すべての他の商品との関連において考察された。だがしかし、この関連は、単に、理論的なもの、考えられたものにすぎなかった。その関連が実際に示されるのは、ただ交換過程においてのみである」(●三六頁)

商品を、もっぱら交換価値の面から分析するばあいの、その商品は、まだ運動の過程になく、交換過程にはないのである。したがって、第一章・第一節においては、交換過程においてはじめて登場し、考察されることになる商品の矛盾、すなわち、使用価値としての実現と価値としての実現との矛盾はまだ登場せず、また、その矛盾を媒介するものとしての貨幣形成の必然性もありえず、まして、交換過程において必然的に形成された貨幣が、こんどは、諸商品

の交換過程の矛盾を媒介することによって、これをどのようにに解決するかは到底問題になしえないのである。

『資本論』の当該個所についての宇野教授の批難が、全く、的のない批難であることのゆえんである。

なお、ついでにいえば、マルクスが、「この方程式は何を意味するか？」と問うている「 $x \text{ 小麦} + y \text{ 鉄} = z \text{ 小麦}$ 」の弊は、「それらの交換関係がいかなるものであろうとも、その交換関係は、つねに、ある与えられた量の小麦が、どれだけかの分量の鉄に等置される」ことを表示したものであった。すなわち、二商品の交換関係を、その全容において示すものでなく、交換価値としての面Ⅱ等置関係のみを抽象的に示すものである。使用価値としての面Ⅰ不等置関係は捨象されていたのである。宇野教授は、「小麦と鉄との等式に示されるような直接的交換と」いわれるけれど、一クォーターの小麦と a ツェントネルの鉄との等置関係を示す方程式は、二商品の「直接的交換」をそっくり表示するものではなく、その「直接的交換」から抽象された交換価値の面のみを、すなわち、まさに等置関係のみを表示しているのである。また、宇野教授は、「小麦と鉄との等式に示されるような直接的交換は、いわゆる物々交換にすぎず、むしろ商品としての交換を示すものではない」というような方もされるのであるが、「直接的交換」は「むしろ商品としての交換を示すもので

はない」ということは、明らかな誤りである。これは、「むしろ商品としての交換ではない」ととざるべきところを、「……を示すものではない」と誤って作文されていると思うが、その点は問わぬとして、右の文章で宇野教授のいわれることを正確に表現すれば、「例の方程式によってその等置関係が示される二商品間の交換なるものは、直接的交換なのであって、それは物々交換にすぎず、むしろ商品交換とはいえないものなのである」ということであろう。それから、二商品間の交換は、およそ商品交換とはいえないものなのであるか。

こういうふう整理して問題をたてただけで、それは、もはや問題にもならぬ愚問であることがわかる。すなわち、二商品間の交換は商品交換にきまつているからである。マルクスが、「さらに二つの商品、たとえば小麦と鉄をとってみよう。……」(④一六頁)と書いているのに、ことさらにその小麦と鉄が二つの商品を例示するものであるということを見逃すから小麦と鉄との交換が「いわゆる物々交換」にされてしまうのである。マルクスが二商品間の交換というのに、宇野教授は、二商品間の交換を勝手に「いわゆる物々交換」にしてしまつておいて、こんどは、それは「むしろ商品としての交換」ではないといつてマルクスを批難するのである。

宇野教授が、「小麦と鉄との等式の内に直ちに両者に

「価値の誘導 (Die Ableitung des Werts)」だつて

々共通なもの々を求めめるのは、商品交換のこの特性を見逃すことになる」といわれるばあいの「商品交換のこの特性」とは、商品の交換は、必ず貨幣を媒介として行われるということである。だが、周知のごとく、マルクスがいうように、「貨幣結晶は、相異なる種類の労働生産物がそこで互いに実際に等置され、したがって、実際に諸商品に転形されるところの交換過程の必然的な産物である。」(④一九五頁)簡単にいえば、貨幣が諸商品の交換過程においてはじめて形成され、これが、交換過程論で発見されるのであって、その逆に、商品交換が貨幣によって形成されるのではない。

二商品の交換は、商品交換の特性を、もっとも簡単に表示するのであり、二商品の交換にさいしての等置関係は、商品の交換価値を、もっとも簡単に表示するのである。

二商品の交換に際しての等置関係を表示する、例の方程式は、最も単純かつ簡単な商品交換の一側面、すなわち、交換価値の面を、抽象的に表示しているのである。(一九六四・九・一一)